

新潟県獣医師会とモンゴル獣医師会との交流 20年の歩み

荻野博明[†] (公社新潟県獣医師会専務理事)



公益社団法人 新潟県獣医師会 (以下「本会」と記す.)は、2000年から20年にわたり国際交流事業における支援活動を通じてモンゴル獣医師会と交流しており、良好な関係が構築されている。現在のモンゴル獣医師会長であるバトスフ氏は学生時代モンゴル獣医師会「新潟基金」(後述)の支援を受けられており、「今の自分があるのは新潟基金のおかげである」と大変感謝されている。

本会とモンゴル獣医師会は2001年に交流内容を確認する協定をはじめて結び、2021年に20年目の節目を迎えることができた。また、2021年は協定更新の年であることから、今後5年間の協定内容を協議し9月1日にオンラインによる調印式を行った。本稿では、これまでの本会の支援活動を通じたモンゴル獣医師会との交流を紹介する。

1 モンゴル獣医師会支援のはじまり

モンゴル国では冬から春にかけて厳しい寒さに見舞われ、「ゾド」と呼ばれる大雪などの自然災害がたびたび発生し、牧畜業にも大きな被害をもたらされる。2000年、同国で寒波や積雪により家畜が大量死し大きな被害が出ていると新聞等で報道された。同年から2002年にかけて発生したゾドでは、モンゴル全土で約1,100万頭(同国全体の約3割)の家畜が死亡したという情報もある。

こうした中、2000年4月30日、豚コレラ予防注射事業の終了に伴い本会の自衛防疫部会が解散した折に特別会計(退職慰労金)の清算に当たって会員有志の方々から本会に寄付された中から20万円を、雪害支援金としてモンゴルに贈呈することとなった。

支援金をモンゴルへ送るにあたり日本獣医師会に相談したところ、当時のモンゴル獣医師会長の娘さん(ソドノムジャフハラランさん)がたまたま日本獣医師会職員宅にホームステイ中であり、近く一時帰国予定であることがわかったことから、その贈呈先をモンゴル獣医師会長



図1 モンゴル獣医師会長が診療獣医師に診療活動費を寄贈(2000年7月6日)

とし、ソドノムジャフハラランさんに託すこととした。同年6月23日、日本獣医師会通常総会が開催された明治記念館において、「家畜の被害が少しでも軽減されることに役立てていただきたい」としたお見舞いの手紙を添えた支援金が当時の本会会長であった布施康正氏からソドノムジャフハラランさんに手渡された。

こうしてモンゴル獣医師会長に届けられた支援金に対してその後届いたお礼の手紙(別紙1)には、支援金の使い道を被害地域における雄山羊の購入や診療獣医師への診療活動など3事業に当てることが詳細に記されていた(図1)。このうち獣医師を志す学生に対する奨学金制度創設について、本会と協議した結果、モンゴル獣医師会「新潟基金」が創設され、支援が始まった。

2 2001～2015年の交流

2001～2015年は「新潟基金」への支援を柱とし、モンゴルへの訪問交流が行われた。

本会では2001年3月21日、有志会員97名から成るモンゴル獣医師会「新潟基金」を支援する会(会長:田中治男氏)が立ち上げられ、8月29日から8日間の日程で、布施康正会長以下5名の会員がはじめてモンゴル獣医師会を訪問した。9月1日、モンゴル農業大学の新学期式において、学生たちが見守る中、モンゴル獣

[†] 連絡責任者: 荻野博明 (公社新潟県獣医師会)

〒950-0965 新潟市中央区新光町15-2 県公社総合ビル6階

☎ 025-284-9298 FAX 025-281-1368

E-mail: sinkenju@sage.ocn.ne.jp

【別紙 1】

2000.7.26

新潟県獣医師会・布施会長 様

はじめに、私どもモンゴルの農民と獣医師たちを支援するために協力したいと20万円（モンゴル通貨1,930,000トゥグルグ）のご支援に対し厚くお礼申し上げます。

2000年6月23日付けのお手紙でよせられたこのご提案を検討した結果、この資金の用途を次の3事業にあてて効果的に活用することといたしました。

- ① この冬から春にかけて飼養家畜に大打撃をうけたドントゴビ県の14戸の農家に対して種雄山羊14頭購入するために500,000トゥグルグを使わせていただきました。これは当該地域で種雄山羊がほとんど死んでしまい、農家からぜひ種雄山羊の購入をとの希望があったためです。
- ② 上記の地域ではフーヘンモンフとジャラガルサーハンの2人の獣医師が診療にあたっているのですが、この地域での多くの家畜を失った農家に対する家畜への感染予防のためのワクチン接種や駆虫のための投薬など、診療活動に500,000トゥグルグを当てさせていただきました。
- ③ モンゴル獣医師会が「新潟基金」と名付けた奨学金制度の創設に930,000トゥグルグを当てさせていただき、モンゴル農業大学で獣医学を学ぶ最も優秀な学生への援助を行うこととしました。

上記の①及び②についてはすでに関係者に対して援助済みであり、学生への奨学金制度創設については、現在検討中です。また、新潟県獣医師会からご支援があったことについては、モンゴル獣医師会誌に掲載予定です。

これらの事業、特に奨学金制度創設に当たり貴会のご要望がございましたら、提案していただければ幸いです。

私の希望を述べさせていただければ、この機会に貴会と当会との協力関係をこれからも継続していくとともに、より発展するようお互い努めていければと考えています。

最後に、貴会の思いやりのあるご支援に改めて感謝申し上げますとともに、貴会会員のみなさまによるしくお伝えください。

モンゴル獣医師会長 ソドノムダルジャー

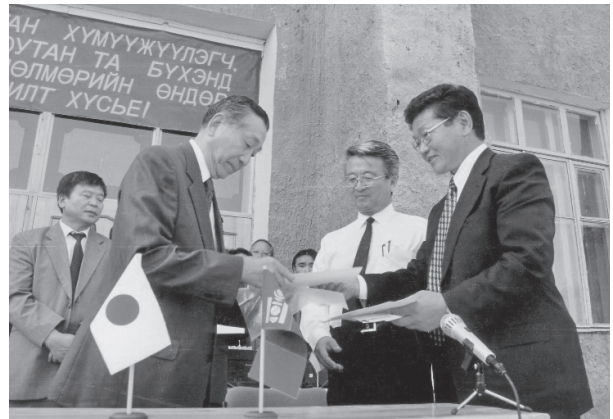


図2 モンゴル農業大学で行われた調印式(2001年9月1日)
本会の布施会長(左)、モンゴル獣医師会のソドノムダルジャー会長(右)

医師会「新潟基金」設立協定書の調印式が、布施会長、モンゴル獣医師会長、モンゴル農業大学獣医学部長の三者により執り行われた(図2)。協定期間は2001年より5年間とされ、この中では獣医学を学ぶ優秀な学生への給付型奨学金制度も設けられた。

以後、2002～2005年まで毎年、6～9月頃に本会会員(5～8名)が支援金を持参してモンゴル獣医師会を訪問し、モンゴル獣医師会の歓迎を受け親睦を図り親しく交流した。2002年には本会会員がモンゴル農業大学入学式に列席しており、また、2004年、2005年にはモンゴル獣医師会に英文雑誌や医療器具等を送っている。2006年には2010年までの5年間の継続協定を結んだ。

2009年10月17日、新潟大学60周年記念事業に出席されたモンゴル農業大学学長から新潟県獣医師会関係者と懇談したいとの要望があり、新潟市内のホテルで懇親会が開催された。モンゴル農業大学学長と副学長が出席され、学長にはモンゴルの獣医療等についてご講演いただいた。

モンゴル獣医師会に雪害支援金を贈呈してから10年が経過し、モンゴル獣医師会「新潟基金」を支援する会の事業が2010年度をもって終了することとなった同年11月28日、モンゴル獣医師会会長を招聘したセミナーが新潟市内のホテルで開催された。当時のバスサイハンソドノム会長には、モンゴルの畜産事情、獣医学教育、モンゴル獣医師会のこと、国の獣医事情、支援金の報告についてご講演いただき、講演後、活発な意見交換がなされ交流を深めた。

2011年3月31日、モンゴル獣医師会「新潟基金」を支援する会が廃止され、以降本会の事業として継続することとなった。同年8月、楠原征治会長以下8名の会員がモンゴル獣医師会を訪問し、3回目の協定書の調印式が行われた(図3)。

2015年8月29日に新潟で開催された中部地区獣医師



図3 2011年に行われた3回目の調印式



図4 坂田動物病院で手術を見学するバトチメグさん（左側の女性）

【別紙2】

日本国新潟県獣医師会 様

C. O. C 動物病院 獣医師 J. GERELTUAYA
期間 2016.11.7～12.7

研 修 報 告 書

日本国新潟県獣医師会とモンゴル獣医師会の協定書に従って、第1回目の研修獣医師として参加させて頂きました。私にとって、初めての動物病院の関係で研修獣医師として経験させて頂き、嬉しく思います。

坂田動物病院で約1カ月研修を行いました。

研修期間中、

- ・動物病院の運営について
- ・動物病院のスタッフと獣医師の仕組みと働いている様子、スタッフ同士の働きぶり
- ・動物病院内の設備管理
- ・カルテのメモと管理方法
- ・医療設備の紹介・使い方
- ・検査のやり方、順番
- ・手術

などを見学させてもらい、モンゴルの動物病院で実施できるような多くの新アイデアを勉強させて頂きました。

坂田動物病院以外に他の動物病院でも見学することが出来ました。

新潟県の動物愛護センターへ連れて行ってもらったことがすごく良かったです。なぜならば、モンゴルで動物愛護センターをつくりたいという夢に向かって行く明るい道が見えて、たくさんのアイデアをもらい、楽しく見学させて頂いたからです。動物を連れて老人ホームを訪れた際の心のケアと動物療法をモンゴルでも実施したくなりました。

野良猫を保護する方法、または不妊・去勢手術を行い、耳に印を付けて解放していることを教えて頂きました。このことを参考にして自分たちの動物病院で実施していきたいと思います。

これらのたくさんの施設を見学させて頂くたびに日本人の働き方、真面目さに感激を受けました。最新設備、医療機器が本当に素晴らしかったです。

今回の研修を通して良かった点は、このようにたくさんの経験と見学をさせて頂き、今後は自分たちの動物病院で実施出来る可能性があると感じたことです。

残念だった点は、動物の手術を実習してみたいという考えがありましたが実現できなかったことです。しかし、見学しながら、新手術方法の新しい知恵を身につけ、発見をすることも出来ました。学んだり覚えたりしたことを、現在自分たちの動物病院で実施しています。

また、私自身の言語能力が足りませんでした。そして、次の研修獣医師は、研修内容を一つに選択し、熱心に勉強した方が良いと思いました。

現在、モンゴルで研修内容の実施中です。大学の学生に実習させながら研修で学んだ知識を伝授していることを嬉しく思います。ウランバートル市内の動物病院の獣医師にも研修内容を共有する予定です。

われわれにこのような機会をくださった皆様方に心から感謝申し上げます。

百文は一見にしかずと言います。私自身の人生に素晴らしい影響力を与えました。



図5 2021年9月1日にオンラインで行われた5回目の調印式（左：モンゴル獣医師会 右：本会）

大会・獣医学術中部地区学会（新潟県開催）の交流会にはモンゴル獣医師会のオルジ会長を招待した。8月30日にモンゴル獣医師会長と本会の国際交流委員会委員との情報交換会を開催し、今後5年間のモンゴルとの交流のあり方について話し合いが行われ、「新潟基金」を終了することとした。

3 2016～2020年の交流

2016年からモンゴル獣医師会の要望により支援金送金は廃止する一方、モンゴル小動物獣医師の育成支援を柱とした交流に改めた。新たな事業としてモンゴルで活躍する獣医師を新潟県獣医師会に派遣する経費を支援することとした。同年8月29日から5日間の日程で、宮川副会長以下10名の会員がモンゴル獣医師会を訪問し、協定書の調印式を行った。

2016～2019年の4年間、モンゴルで小動物診療に従事する獣医師を毎年1人、三条市の坂田動物病院（坂田郁夫医院長）で受け入れた。

研修期間は概ね1カ月で、坂田動物病院の施設で宿泊しながら動物病院の運営、検査のやり方、カルテの管理方法、手術の見学等の研修を行った（図4）。また、新潟県動物愛護センター、新潟県中央家畜保健衛生所など、関係者から協力いただき小動物病院以外の獣医師が勤務する施設見学も行った。帰国後、研修者からは研修報告書（別紙2）が本会に送付された。

2020年は新型コロナウイルスの影響によりモンゴルからの研修生受入れを中止した。

4 2021年以降の交流計画

2021年3月21日、モンゴル獣医師会のバトスフ会長と本会の宮川 保会長とでオンラインにより情報交換を行い、その中で、5年間の協定が終了するにあたり

2021年度からの新たな協定を結ぶことが確認された。バトスフ会長からは「学生時代、モンゴル獣医師会『新潟基金』の支援を受けたので獣医師になることができた。」と述べられ、「新潟基金」再開と本会獣医師の講師としてのモンゴルへの派遣要望があった。このモンゴル獣医師会長の要望を受けて本会の国際交流委員会で協議し、新潟基金によるモンゴルの獣医学生への支援を再開することとした。モンゴルへの講師派遣については新型コロナウイルス感染症の影響もあり、当面、オンラインによる講習会とすることとした。また、モンゴルで活躍する獣医師を新潟県に派遣し小動物分野の診療技術を対象とした研修を行う事業は継続するとともに、今後、モンゴル獣医師会と新潟県獣医師会は定期的にオンラインによる情報交換を行い、相互の交流を深めることとした。

9月1日、上記内容を主旨とする協定書の調印式をバトスフ会長と宮川会長とでオンラインにより行い、お互い約束を誓い合った（図5）。

5 終わりに

新潟県獣医師会とモンゴル獣医師会は「ゾドへの災害見舞金」をきっかけに、以後20年にわたり交流を重ね親交を深めてきた。モンゴル獣医師会のバトスフ会長は、「モンゴルの獣医療は未だ発展途上にあり、獣医療技術の遅れ、医療器具や医薬品確保の困難等问题も潜在化しており、新潟県獣医師会からの継続的な支援を大いに期待している。」との意向を示されている。

本会のこれまでのモンゴル獣医師会への支援は、同国の獣医師育成、獣医療向上に寄与してきたものと考えている。今後とも交流を重ね、相互理解を深めるとともに、本会が対応できる範囲でモンゴル獣医師会の獣医療発展に貢献していきたい。